

読者の席を考えるⅡ：宮澤賢治「よだかの星」と連帯の可能性

畑中，佳恵
立教大学日本学研究所：研究員

<https://doi.org/10.15017/4103504>

出版情報：九大日文. 34, pp.17-30, 2019-10-01. 九州大学日本語文学会
バージョン：
権利関係：

読者の席を考える Ⅱ

——宮澤賢治「よだかの星」と連帯の可能性——

HATANAKA
YOSHIE
畑中 佳恵

一、はじめに

生きることと直結する自他の暴力性に気づかされ、その苦しみから脱出し肉体を滅して火をとますことを願った一羽のよだかが、絶望の果てに自力で飛翔し、天空の星になった——。そんな《ふしぎ》⁽¹⁾とも《劇的》⁽²⁾とも《暗い》⁽³⁾とも評される「よだかの星」は、一〇年程前まで国語教材として親しまれ⁽⁴⁾、昨今も「青空文庫」のアクセス数で上位にランクインするなど⁽⁵⁾、時代を超えて読み継がれている宮澤賢治作品のなかでも名高い一篇である⁽⁶⁾。

「よだかの星」のプロットは、苦難に満ちた生活の場という世俗からの離脱を基本的に肯定するものであり、業や原罪からの救いを希求する宗教的な言説とよく馴染む。作者が浄土真宗を信奉する家に生まれ、法華経の布教活動に身を投じたことをふまえて広く仏教との関わりが注目されており⁽⁷⁾、キリスト教の思想やイメジャリーとの親和性も指摘されてきた⁽⁸⁾。それら一群の先行研究においては、よだかの受難・捨身・転生は宿命

的なものとして観察され、星になった結末に神聖な価値が見出される傾向がある。

宗教イデオロギーを基盤とした自己犠牲については、負の側面に対して厳しい批判もなされてきた。例えば『宮澤賢治殺人事件』（太田出版、一九九七年三月）の著者・吉田司を交え、柄谷行人、関井光男、村井紀の四名によってなされた共同討議では、宮澤賢治の詩や童話に繰り返される「平和主義のかたちをとったファシズム」に警鐘が鳴らされている。単に仏教・法華経というよりも、国家主義や海外膨張主義と密接であった田中智字の日蓮主義に作者が傾倒していた事実をふまえ、矛盾や葛藤のない世界を希求するビジョン、そのために主体の無化をロマンティックに肯定することが問題視されたのである⁽⁹⁾。

一方、宗教のコードやそれと関わる政治のコードには乗らず、よだかの認識と行動について語られた内容や語り口を吟味する作業も進められてきた。清水真砂子は自己犠牲のようにみえるよだかの言動に通底している激しい自己愛を、伊藤眞一郎はその自己愛の裏側に自己の身体への嫌悪を読みとっている⁽¹⁰⁾。また木村功は、他力本願・自力本願といった概念でよく語られるよだかの変化を、主体性の獲得という観点から再評価しようとした⁽¹²⁾。

国語授業を通じてこの作品を鑑賞した読者たちのなかには、自身の道徳観をベースによだかや鷹らの言動を問うものも少なくない。例えば一九六〇年代の授業実践に目を向ければ、中川すみ江がこの作品を論じるなかで、静岡の小学六年生のノート

を紹介している。そこには、牛を食べられなくなった自身の経験から《よだかの気持ちかわかるように思った。だけど、自分が生きるためにはしかたのないことだ、私は、そう思っているが、よだかとはがまんできなかつた》と記す例や、《よだかがたつた一人というのは、おかしい。誰か一人くらいよだかに同情する者や、力をかしてやろうとする者があるはずだと思ふ》と記す例がみえる。¹³⁾ また一九九六年に東京の中学二年生を対象に授業を行った丹藤博文は、食物連鎖の輪に気づき自分の存在を否定したよだかは《地球の自然界のすべてを否定している》ことになるといふ批判的な分析や、《死が美化されている》ことに対しては同感できない部分がある》という意見があつたことを報告している。¹⁴⁾

本稿では、右に挙げた先行研究や読みとりの事例のほかにも、細部をめぐり積み上げられてきた多くの解釈を参照しながら、「作中に用意された読者のための席」につくことで可能となるイメージ形成と、その席から距離をとつてなされるイメージ形成——物語世界をかたちづくる要素を改めて対象化し別の角度から検討することで、どのようなイメージが生まれるか——について、それぞれ論じたい。前者については第二章で、よだかを襲つた暴力を語りに沿つて整理・分析し、よだかのように暴力の場から離脱することの意義と問題点を考えることになる。続く二つの章では後者について、よだかが進んだ道とは異なる選択肢の可能性をめぐり考察を進める。

長崎の作家・青来有一は、被爆者であつた父の記憶やクリス

チャン作家・遠藤周作によるイエス像と交差する光景として、鷹の要求に従い改名してみじめに生きながらえたよだかと、彼の後継者の姿を創作した。本稿第三章ではその小説「私は以来市蔵と申します」に注目し、「よだかの星」のよだかが選ばなかつた「地上での生」という選択肢を浮かび上がらせた。

さらに第四章では、地上で生きる可能性と関わる、もう一つを選択肢を前景化する。よだかが共同体にとどまり他のメンバーとの関係を変容させる可能性は、この作品において決して閉ざされているわけではない。とくによだかの連帯の可能性をめぐりテキストとしての破れ目に注目することで、共同体の暴力に抗う者のための「もう一つの席」を示したいと考える。

二、暴力の場からの離脱、よだかの選択を眺める席

「よだかの星」の語り手は、三人称の全知の視点からよだかが置かれた状況やその時々思考、心情を伝えている。まずはこの語り手に案内されるかたちで「内包された読者」¹⁵⁾の視点を辿りたい。用意された読者の席につくことで、よだかを苦しめた暴力の場がいかなるものだったか確認しよう。

この物語は、《よだかは、実に醜い鳥です》(八三頁)という語り起こしによつて、鳥の共同体におけるよだかの位置づけを語り手も認める事実とするところから始まる。《よだかよりは、ずっと上だ》(八三頁)と自負するひばり、《あのさまをこらん》

(八三頁)と馬鹿にする小さな鳥たち、そんな《鳥の仲間》(八

三頁の態度は、自分とよだかを線引きし、相手を取るに足りない者の領域に追いやろうとするものだろう。よだかの醜い者というステイグマと周縁化は常に強化されており、彼を見る側に立つ鳥たちのメンバーシップを確認する術となっている。

なかでも鷹は、物理的な力の誇示によってメンバーを支配することで共同体の中心的な位置にあり、よだかに対しても命令に従わなければ《つかみ殺すぞ》(八四頁)と威圧していた。そんな鷹が、《市蔵》(八四頁)という名をよだかに与えようとしたことも、もちろん看過できない暴力である。名付けをとおした不均衡な権力関係の強要は、名が対象を規定するという側面からみても——宮澤作品のなかでは、盗森が人間たちから《名からしてぬすと臭い》と疑われた「狼森と笹森、盗森」⁽¹⁶⁾が思い出される——、相手のアイデンティティを操作し支配下に置こうとする力の行使といえる。それに加えて、鷹が《改名の披露》(八四頁)を促したこともまた、重い意味を持つだろう。鷹はよだかを殺すと脅しながら実際は殺そうとしておらず、改名させて一軒残らず挨拶回りをさせたいのである。それは、よだかを共同体の外縁まで遠く排除し、そこに留めおくことが、鷹を中心とした共同体の求心力を確認し合うために必要だったからだろう。⁽¹⁷⁾

よだかは《一たい僕は、なぜかうみんなにいやがられるのだらう》(八五頁)と考えてみるが、真っ先に顔の特徴が思い浮かぶあたり、他のメンバーと価値観を深く共有していることがわかる。鳥共同体による隣接する両生類共同体への蔑視——《か

へるの親類か何かなんだよ》(八三頁)という悪口が成立するベースとなっている認識——についても、よだかは自明のものとして黙認していたのだった。鳥共同体内部で受ける苦痛が耐えがたくなったとき、よだかは初めて、他の共同体との関係において有無をいわさず力を行使してきた自身に気づく。自分たちの捕食行為が、虫共同体や魚共同体にとって《ひどくもがき》(八五頁)抵抗せずにいられない暴力であることを体感し戦慄したのである。生きることに切り離せない加害行為を個の立場で引き受けようとするとき、よだかの苦痛は一段と深まる。

生きとし生けるものの地上を後にしたよだかは空へ向かうが、天体の共同体もまた、自他を線引きして相手を排除する暴力の場だった。よだかが最初に願いを訴えたお日さまは、自分は昼の者だが《お前はひるの鳥ではない》(八七頁)と拒絶した。オリオンの星は自身の歌をうたい続けてよだかの存在そのものを無視し、大犬座の星は《たかゞ鳥ぢやないか》(八八頁)と蔑視した。しずかな北の大熊星は、冷静でない者は頭を冷やせる場所へ行つてこいと追い払い、大風な鷲の星は、身分と金を欠いた者とは話す価値がないと切り捨てた。共同体における排除とその苦痛は、果てがないものとして語られている。

そのなかでも、資本の論理が理不尽な暴力の一つとして登場していることに注意したい。⁽¹⁸⁾よだかが最後に向かった鷲の星から身分と金の必要性を突きつけられたことには、唐突な印象や違和感を抱く読者もあるだろう。しかし、そもそも個にとつて突然姿を現しコントロール不能な生の枠組みとして押しつけ

られているのが、資本の論理である。それに初めて出会ったときのインバクトは人間の経験としても個々人の経験としても忘れられがちだが、ヒトが登場しない「よだかの星」の自然界にまるで当然のように挿入されたことで、本来の不自然さや強制性が際立たせられているともいえよう。

この資本の論理に関心を向けるとき、「市蔵」という鷹から押しつけられた名前がこれと無関係でないことに気づかされるはずである。「市蔵」の問題をめぐってこれまで最も参照されてきたのは、恩田逸夫による指摘¹⁹⁾だろう。恩田は、「これはおそらく夏目漱石『彼岸過迄』の「高等遊民」(須永市蔵)に基づいているのではなからうか。「よだか」は「市蔵」という命名によつて「高等遊民」のレッテルをはられることを「つらい」と感じたのである。」(一三六頁)と述べた。この見解を紹介する論者のうち、阿毛久芳は須永市蔵の出生の秘密に注目することですらに考察を進めている。須永は自分から嫌われるのは小間使いから生まれた継子であるからと知り、納得すると同時に存在の根拠とかかわる孤独を感じた。その孤独の淋しさが、須永とよだかの共通点として指摘されたのである。²⁰⁾

そんな作品間の影響関係(あるいは間テクス的な意味生成)も興味深いが、ここではより素朴な意味作用、すなわち「市蔵」という漢字が喚起するイメージに着目したい。「市」とは古来、人々が生産物を交換する場である。生産の過程でうみだされた剰余価値は、市で金銭その他に換えられ「蔵」のなかに溜め込まれる。つまり市蔵とは、己の命を繋ぐために《どうしてもと

らなければならぬ》(八六頁)必要な分を越えて自然や他人から搾取し、蓄財する者のイメージといえるだろう。宮澤作品において貨幣や資本家に良いイメージが付されていないことは周知のとおりである。「狼森と策森、盗森」(前出、一九二四年)では、話を聞かせてくれた黒坂森にお礼をしようとした語り手が、銅貨をなかなか受け取らなかった森の気性を好ましいものとして報告しているし、「なめとこ山の熊」(児童文学研究会編『現代童話集』耕進社、一九三四年)の金に汚い町の旦那は、世の中の進歩とともに消えゆく嫌な存在として語られていた。「よだかの星」のよだかは、自身を卑しい資本主義と関連付けてより遠くへ周縁化しようとする鷹と、その資本主義社会の華々しい成功者でなければ迎え入れないという天空、それぞれによる暴力的な論理の板挟みになったのである。

ここでいったん整理すると、「よだかの星」の語り手が淡々と伝えるよだかの生きづらさは、種としての特徴が蔑視されるという共同体内の生きづらさ、他の命を奪って自らの命を繋ぐ生き物としての生きづらさ、資本の論理を押しつけられ、その両義性に身動きがとれないという生きづらさ(それは人間的な苦悩である一方野生の動植物にとつても搾取される側として無関係でない)に大別される。読者は、それら全てが個体としての生きづらさとして一身に担われる様を、お日さまとともに《なるほど、ずるぶんづらからう》(八七頁)と追認しながら読み進めるのである。

そんなつらさを解消するため、よだかは《遠く遠くの空の向

ふ》(八六頁)へ脱出しようとした。星々の力を借りることができず、力を落としてもはや地面に落ちるといふとき、高く叫んでもう一度、今度は己の力で空を目指す。鷲のように毛を逆立て、鷹のように鳴き、寒さに喘ぎ苦しみながら、まっすぐにどこまでものぼっていく。そうして彼は、自らが目指した場所に星となつてたどり着いた。肉体的な死を迎える直前に《たしかに少しわらつて》(八九頁)いたことは、彼がその時点で自らの行動に満足したということであり、その事実は重いというべきだろう。他を頼みにせず自力を尽くして行動したこと、心満たされ、望みが叶つたという因果を読みとることは難しくない。

暴力にまみれた現実を動かしたい前提とみなし、葛藤を背負つた一つの命が犠牲になることで静穏が訪れるという結末。そのイメージは、「現実がいかに陰惨であつても、個々人は主観的に救済される」というメッセージに変換できる。例えば⁽²¹⁾はじめを受けた子どもがよだかのようにその場から脱出することは、⁽²²⁾心身や尊厳を保つための緊急の行動であり妥当な判断として尊重されるだろう。逃避による保身や自己肯定を選択せざるをえなくさせた場が温存されるとしても、そしてまた、個の孤独な物語が皆のための物語として横領される可能性があるとしても——。これまで複数の読み手によつて、自己犠牲という要素に死の美化が、とりわけ個を抑圧するファシズムとの親近が懸念されたのは、それらの既に批判され尽くしたかにみえる言説が、生の現場ののっぴきならない選択の副産物として立ち現れ続けるからにはかならない。

この問題について考えるとき、物語末尾を慎重に読む必要がある。とくに星となつたよだかの内面が語られず、そのためよだかの最終的な自己評価——生きていたときの自分の選択をどのように振り返り、自分をつらくさせたものを今はどう捉えているのか——を誰も知ることができないという点は、容易に見逃されるべきでない。よだかの星の沈黙を何の評価も交えずに伝える語り手は、よだかの物語を語り尽くさず、それによつてぎりぎり他者の物語にとどめおいたのである。

そのように考えられる一方、物語の終着点におかれた沈黙が沈黙であることに耐えるのは、読み手にとつて簡単なことではない。よだかの星の沈黙が、読書行為において意味を充填すべき空所とみなされることは避けがたいだろう。その先に、共同体のための自己犠牲物語として読まれる可能性は依然として開かれていくことになる。

三、地上で生きる可能性、青来有一による新たな席

本章では、よだかの行動は最善であつたか、ほかに選択肢はなかつたかという疑問を中心に、語り手によるコントロールから逸脱した考察へと歩みを進める。作中に用意された読者の席をたち、共同体の価値観を共有したまま個人的な満足を得たようにみえるよだかの言動を、改めて吟味しよう。

「よだかの星」のよだかは、人一倍共感能力の高い主人公として登場する。自分を毛嫌いする鳥たちの内面を推し測り、自

分に殺される甲虫や羽虫の側にたつて大声で泣くというように。その共感能力は視野の拡大や認識の相対化には向かわず、もっぱら相手からみられた自己像を強化する方向に働いた。その自己像がつかなくてならないのは、よだかが自らを貶める周囲に同調する一方で、自分は空の彼方で《小さなひかり》(八七頁)を灯すに値すると確信しているからだろう。実際、彼の逃避行は自尊心を満足させるべく上昇志向に貫かれている。

その志向をよく表しているのが、これまで様々に象徴性を解釈されてきた《山やけ》をめぐる記述である。お日さまに拒絶された後、星明かりの上方と山火事の下方を旋回するよだかは、つらさから解放される手段として「二種類の焼死」があることを確認していたようにみえる。《巢の中をきちんとかたづけ、きれいにからだ中のはねや毛をそろへて》(八七頁)家を出たよだかは、その時点で死を覚悟していただろう。夜になって《火のかすかな照りと、つめたいほしあかりの中をとびめぐ》(八七頁)ることを九度繰り返すなかで、よだかは「自然現象による焼死」を下方に幾度も意識しながら、最後までそれを選ぶことはなかった。星々に対して《やけて死んでもかまひませぬ》(八八頁)と訴える一方で、地面に降りて大勢の生き物たちの無差別的な焼死に加わることは是としなかったのである。

鳥類のなかでも最上位の鷺に見立てられる飛翔を実現し、最終的に天の星になって永続しているという到着点は、強く美しく価値あるものの極地を示しているようではある。しかし、鳥たちとそっくりの排除の理屈を弄する星々のなかに場を得たこ

とは喜ぶべきことでない、という見方は根強い。²⁴⁾

本稿では、遠く高い場所を目指したよだかの飛翔において、上や下という方向感覚が失われた瞬間が語られていることにもとくに目配りしておきたい。《もうよだかは落ちてゐるのか、のぼつてゐるのか、さかさになつてゐるのか、上を向いてゐるのかも、わかりませんでした。》(八九頁)。この箇所は先行研究で重視されてこなかったが、よだかの上昇志向に攪乱が生じた瞬間であり、それにもかかわらず《こゝろもちはやすらか》(八九頁)という心理状態に至つたという、一連の経験において最も複雑かつ重要な局面といえる。天空で青く燃え続けるよだかは鳥であつたときの望みを確かに叶えたものの、その過程で、望みを生じさせた価値基準そのものを大きくぐらつかせていた。とすれば、天空で孤独に在り続けるというイメージは、不幸せな色合いを幾重にも帯びることになる。

よだかの進んだ道がはたして最善であつたかという疑問は、よだかが別の道を選び取ることを仮定し、その実現可能性や生じうる光景について考えをめぐらすという方向に読者を誘うだろう。そのとき、読者は作中に用意された自分のための席から離れ、別の選択肢の可能性をめぐって自身の読みを拡張・展開することになる。

「よだかの星」のよだかが選ばなかつた選択肢を照らす例として興味深い作品が、二〇一五年に発表された。青来有一の小説「私は以来市蔵と申します」(『すばる』二〇一五年五月号)である。この小説であり得べき光景として示されたのは、よだかが

屈辱にまみれても生きて語り伝えることを選択する姿だった。

「私は以来市蔵と申します」の語り手は、《原子爆弾の被爆とともにキリシタン殉教の歴史をたどってきた土地の記憶にもとづいて小説を書いてきた》(三〇頁)という、作者自身を思わせる主人公《わたし》である。父の五回目の法要を終えたところで新たな小説を構想している、その試行錯誤そのものを小説として成立させようとの試みであり、末尾には新作となるはずだった『崖つぶちの懺悔室』の一部、《市蔵による神を弁護する演説草稿案のメモ「沈黙の愛——Zinzuni」》(一〇三頁)が配されている。

長崎で被爆して以降《どげんもならん》(二五頁)を口癖にぼんやりと生き、末期癌で病み衰えた頃も息子に何もしてやれないことを詫びてばかりいた父。そんな《わたし》の父をめぐる記憶は、《屈辱のなかでよだから改名した市蔵》が《無理難題をふっかけられて、追いつめられてもなにもできないまま滅んでいく》(二七頁)イメージを喚起した。謂われのない暴力である改名を受け入れ、《葉のくぼみにたまるわずかな露をすすり、屈辱のなかでもなんとか生きぬいて、だれにも知られることなく消えていったとしても、生きていければもうそれでいい》(二七頁)という青来版よだかの選んだ生き方。それは、一六歳の時に長崎原爆による圧倒的な破壊を経験し、その後の六四年間を無力感のなかで過ごすことになった父の姿と重ねられつつ、《丸めた泥団子のような深い輝き》(二七頁)を湛えたものとして価値づけられていく。

《わたし》は遠藤周作『イエスの生涯』(一九七三年)やハンス・ヨーンナス『アウシユヴェイツ以後の神』(品川哲彦訳、二〇〇九年)、H・S・クシュナー『なぜ私だけが苦しむのか——現代のヨブ記』(齋藤武訳、一九九八年)を引きながら、神は虚無であることによって人間に自由を与え、その結果をただ見守り共に苦しむことで大きな愛を示していると考ええる。父の無力さを出すが自分父の愛を生きているのであり、そこには神の根本的な有り様があらわれているのだという気づき。そんな思考のプロセスにおいて、「よだかの星」の宗教のコードがとりわけキリスト教との重なりにおいて強調され、天上の輝きよりも暗い尊い、地べたの生き様があったのではないかという視点がクローズアップされる。読者はこの語り手と共に、ハンス・ヨーンナス及びH・S・クシュナーによる「全能でない神や、遠藤周作による「みじめで辛い生の同伴者としての神」という神のイメージを参照しながら、地上で生きるよだかの姿やその意味するところを対象化することになるのである。

「私は以来市蔵と申します」のよだかは、題名どおり市蔵に改名し、迫害に耐える道を選んだ。そして、トカゲのツイムツムを後継者として自身の惨めな生を終えた。遠藤周作『沈黙』の潜伏キリシタン・イチゾウのように、《杭にくくりつけられ、夜の空の満点の星々をあおいだまま嬉々として海に沈んでい》ったのである(二〇八頁)。よだか(市蔵)は水磔すいだくとなったイチゾウと一体化し、何があっても沈黙している無力な神に連なる存在(あるいはそのような神の存在を証する者)のイメージを帯びる。

理不尽かつ圧倒的な暴力を被ったよだかの孤独な経験は、「よだかの星」では物語世界のなかで誰にも伝えられることがなかった。「私は以来市蔵と申します」では、末尾の入れ子的な断章「沈黙の愛——Zinzumi」によってその点が補充される。この断章を語るのはツィムツムで、彼は法廷で神の存在を証明すべく、市蔵に改名したよだかと二代目・市蔵を襲名した自身の生き様が《神の悲しみの深い虚無につながっている》(一〇七頁)ことを説明する。そして、《私の使命は真実を忘れないで、どんな屈辱をうけようとも生きのびてそれを伝えていくことです》(一〇八頁)と宣言した。

様々な出来事を過去に埋没させないため繰り返し叫ばれ、メッセージとしての鮮度を保つことが困難になつてしまった「語り伝えることの重要性」。そのメッセージが、「よだかの星」をフィクションに読み替える作業をとおして活性化される。そのとき、青来作品に織り込まれてきた浦上・長崎のキリシタン迫害や原爆被災という暴力の記憶についても同時に、無力な神と共にあつた歴史として想起され継承されることが願われているだろう。それは、読者としての青来が「よだかの星」に用意された席を離れ、自作と架橋しつつ切り拓いた視野である。

「私は以来市蔵と申します」を経由することで、「よだかの星」の読者は、新たなあり得べき選択肢が具体性を帯びる様子を目の当たりにする。その意味で、前者に内包された読者の役割のなかには、後者の読者をテキスト間の新たな席へ連れ出すことが含まれているといえるだろう。

四、もう一羽のよだか、もう一つの席をめくって

本稿において、地上で生きるもう一つの選択肢として示したのは、よだかが同じ条件をもつよだかを探し求め、問題を共有しながら生きる姿である。「よだかの星」においては、個の苦しみを逃げ場のないものとして描く物語設定によって、よだか達の連帯の可能性は一見排除されているようにみえる。

一個体が種の代表として描かれているという作品世界の特徴は、先行研究でもしばしば指摘されてきた⁽²⁵⁾。この設定をベースに、よだかは種の特徴を個の問題として悩み孤独な逃避行を選ぶことになる。別れの挨拶を受けて弟の川せみが《僕ひとりぼっちになつてしまふぢやありませんか》と引き留めようとしたとき、よだかは心動かされる様子もなく、《それはね。どうも仕方ないのだ》(八六頁)と会話と断ち切つた。彼の認識する世界はひとりぼっちが基本なのである。

他者といかに問題を共有するか、問題解決のためいかに連帯できるかは、常に今日的な課題であり難題である。よだかのように問題が暴力をともなつて我が身に降りかかる(あるいは他者を巻き込み苦痛を与えてしまう)当事者であれば、前述のいじめを受ける子ども例のように、その力学が働く場から離脱することは優先すべき選択肢となる。他方、問題を温存しないために暴力を行使する側に働きかけるという選択肢は、作中で一顧だにされなかった。そこには、きょうだいである川せみや蜂すず

めとさえ違えばかりが目立つ自分に悩みを共有できる仲間などあろうはずがない、というよだかの諦観がイメージされるだろう。青来版よだかの後継者が鳥類でなく爬虫類に属するツィムツィムであつたことも、このイメージと親和的である。

鳥共同体におけるよだかの連帯は、どう足掻いても不可能だつたのだろうか。よだかが種々個々のただ一羽しかおらず、なおかつ《ほかの鳥は、もう、よだかの顔を見たゞけでも、いやになつてしまふといふ工合でした。》(八三頁)というように蔑視を一身に浴びる状況ならば、周縁への排除を止めることは至難の業だろう。他ならぬよだか自身もこの共同体の眼差しを内面化しているのだから、彼の孤立を問題化し解決へ向かうことは絶望的であるかに思われる。

だがしかし、個と種が一对一に対応するという世界観は作中に徹底されているようでありながら、小さな破れ目を覗かせてはいないか。本稿で最後にスポットライトを当てるのは、物語前半のささやかなエピソードに登場する脇役である。よだかはかつて一羽のめじろの子を救つたことがあり、それを思い出し、てばやくことがあつた。

それだつて、僕は今まで、なんにも悪いことをしたことがない。赤ん坊のめじろが巣から落ちてゐたときは、助けて巣へ連れて行ってやつた。そしたらめじろは、赤ん坊をまるでぬす人からでもとりかへすやうに僕からひきはなしたんだなあ。それからひどく僕を笑つたつて。(八五頁)

自他に誇れるはずの善行によつて、自分を貶める周囲の眼差しが浮き彫りになるといふ、よだかの暗い記憶に刻まれたためじろの親子。この親子の存在こそ、鳥共同体に所属するめじろは一羽でないことを端的に証するものである。二羽のめじろが生きる世界ならば、よだかもただ一羽とは断定できないだろう。

また仮に、めじろから生まれた雛がヒヨドリやモズなど他の種に成長することで、よだか・川せみ・蜂すずめのような種を異にするきようだいの形態が生じるのだとすれば、持つて生まれた特徴が変じてよだかに成る者もいるかもしれない。例えばよだかと名前の一部を共有し飛翔する姿や鳴き声の似ていた鷹が、それを《ひじゃうに気にかけて》嫌がり、《お前とおれでは、よつぼど人格がちがふんだよ》と差異を言いつのつたのは(八四頁)、中心たる王と周縁を構成する賤民がその対称性によつて容易に入れ替わりうることのみならず、類似点の多い自分がいつかよだかに成ることの不安ゆえだつた、ともイメージできる。

よだかは、虫たちを殺し鷹に殺されそうな自分を《たゞ一つの僕》(八六頁)と呼んだが、誰とも取り替えのきかない唯一無二の存在だという自己認識は全く以て正しい。と同時に、彼が存在するうえで担うことになつた諸条件は、彼一人に由来するものとは限らない。この二つの面は矛盾なく両立するのである。

鳥共同体のなかで毛嫌いされてきたよだかの諸条件は、複数のメンバーによつて共有されるとき、あるいは誰もが将来的に

持ちうるものと認識されるとき、どのように語られ始めるだろう。少なくとも、よだかをよだかであるがゆえに軽蔑し嘲笑うことは、どんな鳥であれ躊躇せざるをえなくなるのではないか。この、生きていたよだかと変容する共同体の光景を想像する場所に、「もう一つの読者の席」がある。

五、まとめにかえて

幾重にも分断され人権を損なわれている者の側から共同体システム（あるいは複数の共同体をまたぐ社会システム）に働きかけることが容易でないことは、部落解放や公害認定の苦難の歴史に鑑みるまでもなく周知の事実である。とりわけ近年の新自由主義的なグローバル化のなかで、「国民」「労働者」「一億総中流」といった社会表象を通じた人々の繋がりは、力を失い続けている。人々の共通意識や協力関係が弱まることで福祉的平等は後退し、格差が拡大し、増大するリスクとその不均衡な分配を改善していくことはひどく困難になってしまった。古典的なナシヨナリズムに訴えずに新たな連帯を構想するという難題は、いまや先送りする余地もなく私たちの眼前に突きつけられているといつていい。²⁶⁾

そんな苦境を現にサバイブしながら、自分とよく似た生きづらさを抱える誰かとの連帯を模索する者にとって、天空に輝くよだかは淋しい孤独の青色である。対極となる希望のイメージは、生きていたよだかにもう一羽のよだかを探す余地があった

という点で辛うじて結ばれ、そこからそれぞれの読者によって展望されるしかない。その意味で、《よだかがたつた一人というのは、おかしい。誰か一人くらいよだかに同情する者や、力をかけてやろうとする者があるはずだと思ふ》という第一章で紹介した一九六〇年代の六年生の読み方は、決して無根拠なものでなく、また半世紀後の時代状況にとって一層身につまされる問題を指摘していたといえよう。

個||種という「よだかの星」の語り手が当然視する光景は、よだかの受難が生じるために必要不可欠なものである。その虚構世界の独自法則は、当然のことながら、現実世界の言語使用を利用してつづ構築され伝達されるほかない。そのとき、個||種というルールに則った「めじろから生まれた、めじろでない赤ん坊」が新たに分節化されず、《赤ん坊のめじろ》(八五頁)という現実世界の用語によって浸食されたこと。そこに露呈しているのは、虚構とはいえ様々なメンバーがやり取りしながら暮らす共同体の具体的光景を描くにあたり、個||種という想定に無理があったということではないだろうか。そうであるなら、個としての生きづらさと種としての生きづらさを同一視するフイクシヨナルな想定は、現実の共同体システムにおける個の生きづらさを深く、あるいは視点を変えて理解する装置としては期待できないということになる。また逆に、個||種として生きているわけではないという事実が人々の生の基盤に組み込まれており、そのことを努々軽んじるべきでないとも考えられる。私は決してひとりでなく、私の問題は決して私ひとりの問題で

はないのだ。

作り手や語り手によつて統御し尽くされることがない作品の細部が、テキストの破れ目として分節化の対象となり、新たなイメーヂを呼び込む風穴となる。私たち読み手はイメーヂの揺らぎを追い、流動化する対象を鮮やかに見渡せる席を探すことができるし、そこからテキストのネットワークに清新な風を吹き渡らせることもできるだろう。テキストとともに自らを——孤独な者たちとその連帯を——励まし力づける風を。

【注記】

- 1 清水真砂子「よだかの星」論（『日本児童文学別冊 宮沢賢治童話の世界』すばる書房、一九七六年二月、一二七頁）
- 2 村瀬学「越えられない状況を越える時「よだかの星」の巧妙な構成から」（『宮沢賢治』九号、一九八九年一月、六二頁）
- 3 中野新治「賢治童話はなぜ「暗い」のか——「よだかの星」管見——」（『日本文学研究』二二巻、一九八六年一月、一一七頁）
- 4 『読んでおきたい名著案内 教科書掲載作品 小・中学校編』（日外アソシエーツ編集発行、二〇〇八年二月）によると、「よだかの星」は一九五〇年代後半に二社の小学五年生、六年生用の教科書に、五〇年代から七〇年代にかけて四社の中学一年生用教科書に掲載された。また『読んでおきたい名著案内 教科書掲載作品 13000』（日外アソシエーツ編集発行、二〇〇八年四月）によると、一九九一年から二〇〇三年まで三社の高校生用教科書に掲載された。
- 5 インターネット電子図書館「青空文庫」（<https://www.aozora.gr.jp/>）のメ

インサイトにおける作品ファイルへのアクセスランキング（ファイル種別ごとに五〇〇位まで掲示）によると、「よだかの星」の XHTML 版ランキングは二〇一七年（通年）が二七位、二〇一八年（通年）が一九位。

6 「よだかの星」は生前未発表の作品で、一九二一年頃の執筆と推測されている。初出は作者の死の翌年に刊行された『宮澤賢治全集 第三巻 作品 童話・寓話・劇』（文圃堂、一九三四年一〇月）。本稿では『新』校本 宮澤賢治全集 第八巻 童話 本文篇（筑摩書房、一九九五年五月）所収の本文を使用した。

7 欣求浄土、厭離穢土という寓意を指摘する西田良子「作品紹介『よだかの星』解説」（『四次元 宮沢賢治研究』別冊、一九五七年九月）、大乗仏教の教えを読みとる染谷昇「よだかの星」の鑑賞（『日本文学』一九巻二号、一九七〇年二月）、よだかは捨身によつて仏性になり変わったとする萩原昌好「『夜だかの星』論」（『国文学 解釈と鑑賞』五八巻九号、一九九三年九月）、法華経修行によつて成仏したとする呉善華「『よだかの星』——生と死の狭間——」（『国文学 解釈と鑑賞』六一巻一号、一九九六年一月）、衆愚救済の前段階をみる黄英「よだかの死と修羅意識」（『Comparatio』二二号、二〇〇八年一月）、仏教転生譚であるジャータカの物語形式と比較する下西善三郎「ジャータカの形式と賢治童話——『よだかの星』にふれて——」（『上越教育大学国語研究』三一巻、二〇一七年二月）など。

8 関口安義「よだかの星」の世界——「悪より救い出したまえ」の祈り——」（『キリスト教文学研究』二三号、二〇〇六年五月）、遠藤祐「よだかの星」再読——聖書的な視点から」（『キリスト教文学研究』二四号、二〇〇七年五月）。

9 「共同討議 宮澤賢治をめぐる」(『批評空間』II期 四号、一九九七年

七月)。とくに関井光男によつて、田中智学の強調する不借身命(世間の人々が日蓮と同じ一つの心をもつよう、難事を忍び自らを献じる)という全体主義の思想が紹介され、それと通底する宮澤賢治の諸言説が批判された。なお、このテーマを追求した研究に、周異夫「宮澤賢治の国家主義的想念——田中智学国柱会との関連を中心に——」(『人文研究』四九卷二号、一九九九年九月)、西田良子「大正十年の宮澤賢治——賢治と国柱会——」(『国語国文学研究』三六号、二〇〇一年二月)等がある。

10 清水真砂子「よだかの星」論(注)

11 伊藤眞一郎「宮澤賢治『よだかの星』試論」(栗原敦編『日本文学研究資料新集』26 宮澤賢治・童話の宇宙) 有精堂出版、一九九〇年(二月)

12 木村功「教科書教材を『読む』・宮澤賢治『よだかの星』論——「ある」ことから「なる」ことへ——」(『岡山大学教育学部研究集録』一二六号、二〇〇四年七月)

13 中川すみ江「教材研究『よだかの星』」(『日本文学』一二巻四号、一九六三年四月、二九二頁)

14 丹藤博文「読むという葛藤——『よだかの星』の実践——」(『日本文学』四六巻八号、一九九七年八月、五三〇～五四四頁)

15 「内包された読者」の概念はW・イーザー『行為としての読書』(一九七六年/齋田収訳、岩波書店、一九九八年五月)による。イーザーは読書行為における受容の理論を構築するため、文学作品に配置された視点にたつことで様々な要素を関連付け一貫性を形成するようイメージを展開していく。「内包された読者」の役割を考察した。本稿ではこれをふまえ、「内包された読者」の役割を遂行することを、作中に用意された読者の

ための席につくことと表現している。

16 宮澤賢治「狼森と笹森、盗森」(『イーハトヴ童話 注文の多い料理店』杜陵出版部、一九二四年二月/『新』校本 宮澤賢治全集 第十二巻 童話V・劇・その他 本文篇) 筑摩書房、一九九五年一月、二六頁)

17 この点について中野新治(注3)は、『市藏』は人間の名前であり鳥のものではないのだから、ここでよだかは「外縁にいる者」に甘んじることさえ許されず決定的に鳥の社会から押し出されたことになる。(一二二頁)と指摘し、牛山恵(子どもが読む『よだかの星』——擬制を撃つ——)『日本文学』五二巻三三三、二〇〇三年三月)、竜口佐知子「宮澤賢治『よだかの星』論——〈関係〉の問題を中心に——」(『福岡大学日本文学』一四号、二〇〇四年二月)も同様の見方を示した。

それに対し本稿では、鷹が改名の披露がなされたか一軒一軒確認すると言い、今すぐ殺してくれと嘆願するよだかに後でよく考えるよう論じたことから、鷹はよだかを支配下に置き続けることを望んでいたと読む。

18 直接「よだかの星」に言及しないが、宮澤作品における貨幣のモチーフを論じたものに秋枝美保「宮澤賢治「山男もの」における「貨幣」のモチーフについて——童話「山男の四月」を中心に——」(『論叢宮澤賢治』二号、一九九八年三月)がある。また、自然・人間への資本の論理の介入を論じたものに闇慧「宮澤賢治文学における植民地主義と越境への意志——「鹿踊りのはじまり」、「狼森と笹森、盗森」、「なめとこ山の熊」——」(『研究論集』一五巻、二〇一六年一月)がある。

19 恩田逸夫「宮澤賢治の命名意識」(『宮澤賢治論』3 童話研究他) 東京書籍、一九七六年(一〇月)

20 阿毛久芳「よだかの星」についての感想、二、三」(『賢治研究』一一

七号、二〇二二年四月)

21 「よだかの星」は、子どものいじめという社会問題と関連付けて語られることも少なくない。例えば宮川俊彦「古典を読み解く7 『よだかの星』に見る光り続けていくという文化」『季刊現代警察』三八巻二号、二〇二一年一〇月)は、実際のいじめ自殺事件を念頭におきつつこの作品を紹介するなかで、いじめ被害に苦しむ子の自己打開を理想とする一方、きつければ学校に行かないという対処も肯定している。

22 この両義性について秦野一宏「燃える」ということ―宮沢賢治「よだかの星」をめぐって」『海保大研究報告』六三巻二号、二〇一九年三月)は、自らを例外的に低いところに置くとことから生まれるエリート意識を指摘し、『醜さゆえに自分を特別視するよだかの捻れた自尊心』(一八頁)を論じている。

23 「山やけ」についてはこれまで様々に解釈されてきた。清水真砂子(注1)はよだかと作者を重ねるなかで、『その存在をおびやかす(と彼には感じられた)世間』(一二二頁)であると考え、その清水論に應えるかたちで村瀬学(注2)は、一つの境界を越えるときの摩擦から生じた火であると論じた。一方、中野新治(注3)は『生物を焼く「業火」のシンボル』(二一八頁)とし、これを引きつつ林敏恵・沈美雪(「よだかの星」における「光」のイメージジャーナル「太陽の光」「山やけの火」「星の光」をめぐって)、『大葉應用日本語學報』六号、二〇二二年七月)は、よだかの罪意識の表れとした。また松田嗣敏(「喩としてのよだかの自立―「よだかの星」試論―『賢治研究』八四号、二〇〇一年四月)は、草や木という他の生命を燃やす山やけの火は他の生命に依存して生きるよだかの同類であり、よだかはそこから訣別するとみ、竜口佐知子(注17)も同

様の見解を示している。

本稿では、『遠くの山火事』(八六頁)が川せみの関心事にもなっていたことから、それに近づくことは死に直結する《恐ろしい》(八六頁)こととして広く理解されていたと考ええる。そのうえで、山火事が雲を燃やすように上方へも広がっていく描写から、『灼けて死んでもかまひません』(八七頁)と天空に訴えるよだかの焼死のイメージは、山火事に触発されて生じ、星の燃焼へ投影されたものとみる。よだかの一見素朴に見える上昇志向には複雑な精神活動が伴っており、その後の上下の感覚の攪乱に繋がっていくと読むことができるのではないかと。

24 例えば木村功(注12)は、『俗物の星々のいる天上の世界で、小さいわが身を灼きながら、地上を照らし続けるという永劫の苦痛の中に自らを置くことになった』(一七頁)とし、また渋谷百合絵(「宮沢賢治「よだかの星」論―近代自然科学と大正期童話の融合―」『国語と国文学』九一巻二号、二〇一四年二月)は、『よだかの星の孤独で寂しいあり様は、よだかの悲劇的決定的な解決不可能性を示唆する』(六四頁)と読む。

25 原子朗(「よだかの星」をめぐって)『宮沢賢治』九号、一九八九年一月)は、よだかが『あえて単数化、孤独化されている』(三六頁)ことに作者の孤独感をみた。よだかという名が『個人名』のように扱われつつも、『種の名』のように扱われている、という仕組みに注目したのは村瀬学(注2)である。以降も、渋谷百合絵(注24)は自然科学的な説明によって『種の特徴を一人で背負う存在』(六三頁)であることが違和感なく受容されると指摘し、竹原陽子(「よだかの星」論―よだかにおける神とその飛翔)『清心語文』一七号、二〇一五年一月)は神との結びつきという観点から『よだか』の名のもつ、個と種の二重性』(一

七頁)を取り上げている。

26 この問題を論じる近年の研究成果として、安達智史「リスクと移民からみる連帯の可能性」(『学術の動向』二二巻一〇号、二〇一七年一〇月)、中村美智太郎「連帯可能性としてのリスク・コミュニティへの視座―再帰的近代化と道徳のリスクの問題―」(『静岡大学教育学部研究報告』六九号、二〇一八年一月)を参照した。分断を危惧し、『ナショナルリズムや暴力とは異なる社会的な連帯感をどう形成するか、という視点』(井手英策「ファシズムへの懸念」中間層軸の分配政策示せ)『毎日新聞』二〇一九年八月二二日付朝刊)の重要性を指摘する声は、直近の一般紙にもみられる。例えば津田大介「異論と向き合う 分断防く 感情的つながり」(『朝日新聞』二〇一九年八月二九日付朝刊)は、若者たちの分断や若者と高齢者の間で起きている分断を取り上げ、打開策を探る研究や事例について右の井手による提言も含め紹介している。

【付記】

本稿は「読者の席を考える―芥川龍之介「二つの手紙」と関わるために―」(『九大日文』一号、二〇〇二年七月)の続編にあたる。カノンと化した作者・作品を取り上げることの功罪、そして、「内包された読者」の席やそれと異なる新たな席を前景化し評価するという研究者の役割については、右の拙稿も参照されたい。

(立教大学日本学研究所研究員、福岡教育大学ほか非常勤講師)